

「カインとアベル」

2020年10月23日

主はカインに言われた。「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」彼は言った。「知りません。私は弟の番人でしょうか。」主は言われた。「何ということをしたのか。あなたの弟の血が土の中から私に向かって叫んでいる。今やあなたは呪われている。(創世記4章9節～11節a)

「さて、人はエバを知った。」聖書では「知る」という言葉は性的交渉を持つことを指す。アダムとエバは実質、夫婦関係になったということである。エバは身ごもり男児を得て、カインと名付けた。カインは「得る」という意味で、エバの喜びが込められている。彼女は弟アベルを生んだ。アベルは「儂い、空しい」という意味で、存在感が希薄に感じられる。カインは土を耕す農耕者となり、アベルは羊を飼う牧羊者となった。日が経って、カインは土地の実りを神への供え物にした。アベルは羊の初子、その中でも肥えた羊を供え物にした。神はアベルとその供え物に目を留められたが、カインとその供え物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。なぜ、アベルは顧みられ、カインは無視されたのか。ヘブライ書は「信仰によって、アベルはカインよりまさるいけにえを神に献げ、それにより正しい者であることが認められました。(ヘブライ11:4a)」と注解している。神から「正しいことをしているのなら、顔を上げられるはずではないか」と言われた時、返答をしていない。心にやましい供え物であったのかも知れない。イスラエル人は元来、牧羊者であった。農耕者は集団で土地に住み付き、ピラミット型の権力構造を造る。牧羊文化を誇るイスラエル人は農耕文化を蔑んだ。旧約聖書は一貫して、カナン農耕文化の権力構造と、その文化が持つ豊穡を願う偶像・バアルを拒否している。カインの供え物が受け入れられなかったことは、この文化批判が背後にあるのかも知れない。

神は怒るカインに「罪が戸口で待ち伏せている。罪はあなたを求め、あなたはそれを治めなければならない」と、悔い改めを促すように諭される。しかし、野にいた時、カインは弟アベルを襲って、殺してしまう。カインのアベルへの嫉妬が、弟殺しの罪を生んだのである。アダムとエバが、食べてはならない善悪の知識の木の実を食べた罪が人類最初の弟殺しの悲劇へと発展している。神は、弟殺しを知りながら、「あなたの弟アベルはどこにいますか」と問いかけられる。禁断の木の実を食べたアダムとエバは神が近づいて来られたのを知って、木の間に身を隠した時、「どこにいるのか」と問いかけられている。神は、人間を求めて常に、「あなたはどこで、何をしているのか」と問われるのである。アベルは「知りません。私は弟の番人でしょうか」と、心を頑なにし、神の問いかけを拒否する。神は「何ということをしたのです」と叱責し、あなたは呪われ、弟の血が流れた土地も呪われ、土を耕しても、実を結ぶ力がない。あなたは地上をさまよい、さすらう者となると厳しい裁きを告げる。この時、カインは初めて、罪の大きさにおののく。「私の過ちは大きく、背負いきれません。あなたは今日、私をこの土地から追放されたので、私はあなたの前から身を隠します。私は地上をさまよい、さすらう者となり、私を見つける者は誰であれ、私を殺すでしょう。」ところが神は、カインを見つける者が、彼を打ち殺すことがないように、しるしを付けられた。神は、罪を犯したカインを、なお守るとしるしを付けられたのである。神は罪に対して厳しく責任を問われるが、その責任を担う苦難の中でも、なお生きて行く祝福の道を備えてくださる。罪を超えた赦しが聖書の根本的な主題である。